

まつぎ かみはま だ
松崎遺跡・上浜田遺跡

所在地 東海市大田町
(北緯35度1分38秒 東経136度53分45秒)

調査理由 名古屋鉄道常滑線連続立体交差事業

調査期間 平成20年8月～平成21年3月

調査面積 6,200㎡

担当者 池本正明・松田訓・川添和暁



調査地点(1/2.5万「鳴海」)

調査の経過 名古屋鉄道常滑線連続立体交差事業に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて、発掘調査を実施した。調査は、松崎遺跡・上浜田遺跡を通して行っており、調査面積6,200㎡は2遺跡分の合計である。松崎遺跡は、古墳時代～古代にかけての製塩遺跡として、日本列島で初めて”藻塩焼く”という塩作りが実証的に証明された遺跡としても全国的に著名である。

立地と環境 松崎遺跡・上浜田遺跡は、東海市大田町の伊勢湾岸に面した、最も海側の浜堤上(砂堆)に位置している。遺跡は、現在の標高で2.2m～4mを測り、松崎遺跡では南北400m・東西100mにわたる細長い区域が遺跡範囲と考えられている。

調査区を横断する国道247号線を挟んで、北側にA区、南側にB区を設定し、さらにA区の北側をAa区・南側をAb区と設定した。人為的作用による遺跡の形成としては、土器製塩に関わる包含層が形成された古墳時代から古代と、中世から近世、1900年代初め以降の大きく3期に分けられる。1900年代初めは、当時の愛知鉄道が鉄道敷設時に土地改変した時期である。

調査の概要 今回の調査により、遺跡が立地する砂堆は大きな一つのものではなく、細長い小単位の砂堆が集まって、複雑な地形を形成していることが明らかとなった。形成は古墳時代以前と考えられるものの、明確な形成年代は不明である。今回の調査でAa区、Ab区からB区の北半分という二つの大きな高まりが確認できた。Aa区の砂堆は海岸線に併行して細長い砂堆が二条重なって形成されている。Ab区からB区の北半分では北東―南西方向に伸びるAa区とは別の砂堆であるが、B区調査区中央部付近で落ち込んでいるものと考えられる。B区は調査区中央部から南方向にかけては湿地状の地形を呈していたものと考えられる。

古墳時代 Aa区では、多量の製塩土器片を含む黒色砂層を、長さ90m、最大で厚さ1m程度確認した。製塩土器は知多式I類～III類を主体とし、わずかに須恵器片も含む。遺物包含層の堆積はしまりが強くなく、製塩土器片は脚部の出土が著しく、口縁部・胴部片の出土は希少であることが、この包含層の大きな特徴である。

Ab区では、調査区東側を中心に、黒色シルト質砂層を主体とする遺物包含層と堅穴建物跡などの遺構を検出した。黒色シルト質砂層は、調査区南東端で検出され、しまりが強く、炭化物・焼土・製塩土器細片を多量に含む遺物包含層である。製塩土器は知多式I類を主体としており現況では15m×2mの範囲で確認できた。その北側に、20m×10mの範囲にわたって粘土が斑土状・ブロック状などに展開する区域があり、一部はカマドになる可能性があり、それに伴う堅穴建物跡も検出された。付近からは土師器甕・須恵器が多く出土する。B区では調査区北半分の区域では、須恵器がまとまって出土する遺物包含層(灰褐色砂層)が確認されている。灰褐色砂層は複数存在し、ハマグリを主体とする貝層と互層状

を呈している。また竪穴建物埋土内および黒色シルト質砂層下では、古墳時代に属する貝層を検出した。

古 代

Aa区では、包含層を掘削すると、知多式I～III類に伴って、上層からIV類・V類が出土する。包含層堆積の様相には変化はなく、明瞭な間層も確認できなかった。Ab区では調査区西半分を中心に、土器製塩に伴う遺物包含層(黒色シルト質砂層)を確認した。包含層のしまりは固く、炭化物・焼土・製塩土器細片を多量に含む。製塩土器は知多式IV類が主体であり、若干の須恵器・灰釉陶器を含むことがある。黒色シルト質砂層は、55m×5mの範囲に多数の小単位の層が重なり合って形成されており、最大で厚さ50cmを測る。黒色シルト質砂層からは、立位状態を呈する製塩土器脚部が散発的に出土した。黒色シルト質砂層は調査区東半分にも広く展開していたものと考えられるが、以前の調査で掘削されたものと考えられる。黒色シルト質砂層内あるいは下には、ハマグリを主体とする貝層が確認されている。B区では竪穴建物跡1棟と溝1条を検出した。竪穴建物跡は長方形を呈し、掘り形底面で焼けた礫がまとまって検出された。溝の方向は竪穴建物跡の横軸と併行する。またB区では貝を含む黒褐色シルト質砂層の堆積が確認できており、古代においても貝層の形成が行われていたようである。

中世から近世

中世の遺構としては、Aa区において山茶碗を出土するピットが検出された。Ab区では、明確な年代は不明であるものの、埋葬人骨が残存する土坑墓が1基検出された。長方形を呈する土坑内に埋葬された成人男性の伸展葬である。解剖学的位置をほぼ留めているものの、第一頸椎付近および下顎骨付近のみが乱れており、上顎内および右肩甲骨付近には鉄器が出土しており、特に右肩甲骨付近の鉄器は複雑な構造を呈している。

近世末の新田開発に伴う土盛りなどの整地活動が確認できた。特に、Aa区では、古墳時代および古代の遺物包含層を用いて海側に張り出すように土盛りを行っており、部分的に土橋状の張り出し部が形成されている。また、Aa区では海側に向かって水田が広がっている様子も確認されている。B区では、砂堆が南側に落ち込む調査区南側において、水田畦畔が確認できており、畦畔を覆うように西側から須恵器・製塩土器・貝殻を含む砂層の堆積が確認できた。西側には上浜田遺跡が位置しており、畦畔を覆う遺物包含層は、本来上浜田遺跡の包含層であったものが二次堆積した可能性が考えられる。

出土遺物

遺物は人工遺物と動物遺存体に分けられる。人工遺物では、多量の製塩土器片と土師器・須恵器・灰釉陶器があり、若干山茶碗などの陶器片も出土した。また、漁網錘の出土も多く、土製紡錘車・土製支脚・砥石・鉄滓・鉄製釣針・銅製の帯金具・貝製刃器?も出土した。動物遺存体は、貝類ではハマグリ・マガキ・サルボウなどのフネガイ科・アカニシ・マテガイ・ツメタガイ・ウミニナ、魚類ではタイ類・スズキ・コチ・エイ・サメ、哺乳類ではシカ・イヌ・ウシあるいはウマが出土した。



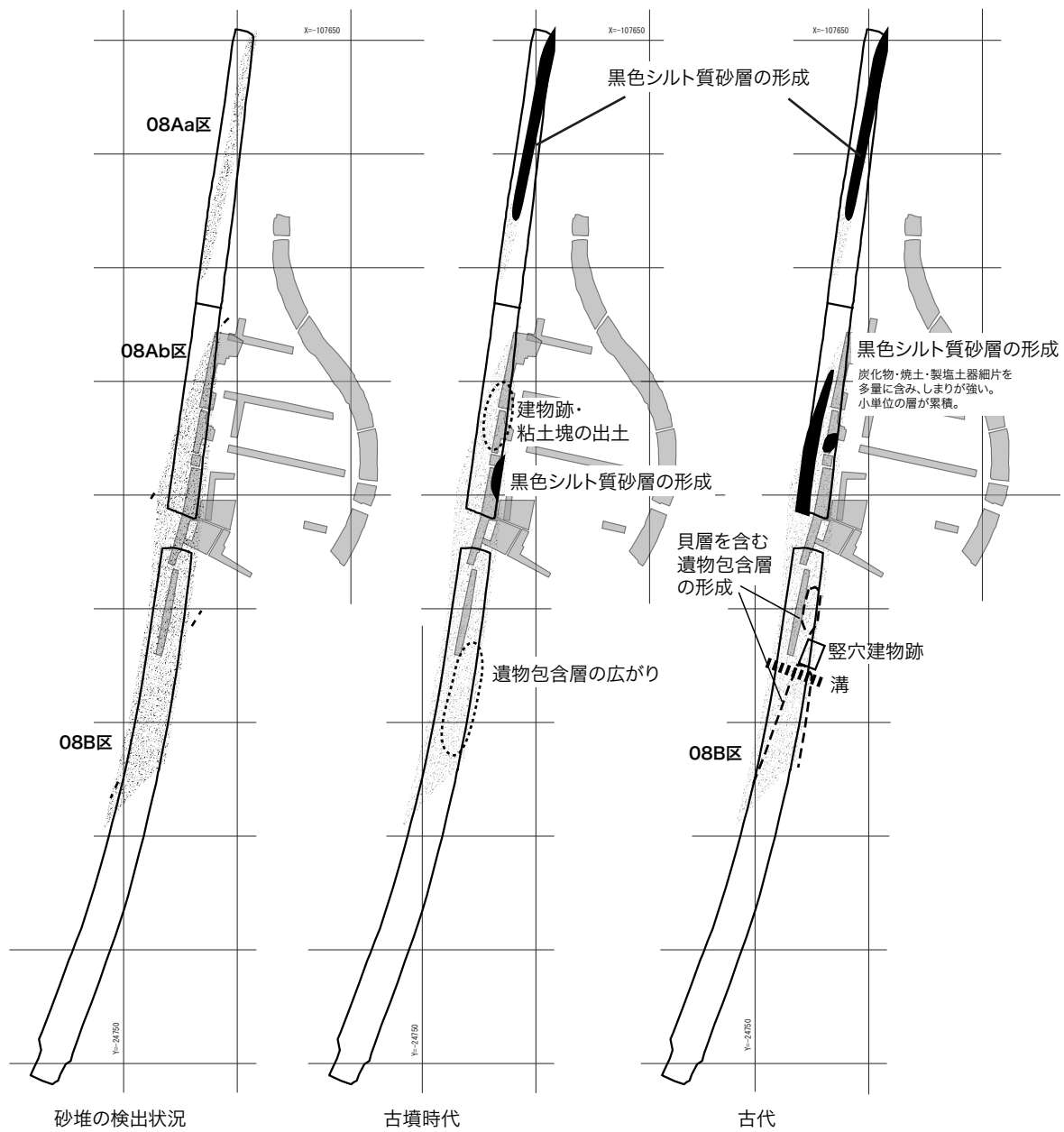


図2 松崎遺跡の変遷 (1/3,000)



Aa区遺物包含層の検出状況 (北より)



Aa区遺物包含層の堆積状況 (北より)

総括 今回の調査によって、これまで想定されていた松崎遺跡の北端と南端を調査で確認することができた。上浜田遺跡はB区のより西側に展開しているものと考えられる。

松崎遺跡は一つの大きい砂堆の上にあるではなく、海岸線に沿って形成された、いくつかの砂堆が集まっており、当時は高低のある極めて複雑な地形を適宜利用しながら塩作りなどの活動を行っていたことが明らかとなった。

遺物包含層でも、Aa区・Ab区の様相は大きく異なっており、特にAb区では、この遺物包含層自体が土器製塩に伴う火を使う作業（煎熬作業など）を行った場の痕跡である可能性が考えられる。立位で出土した製塩土器脚部の意義は今後の検討課題である。

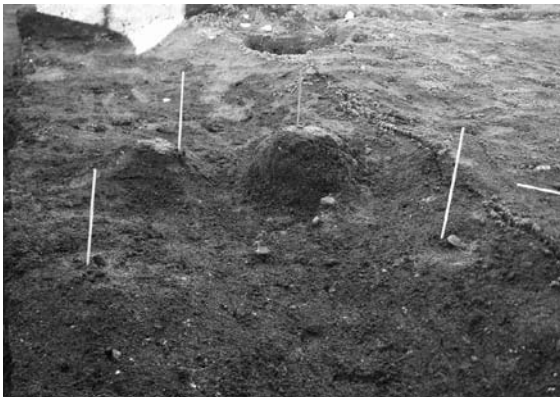
遺跡からは、古墳時代および古代の貝層が検出された。古墳時代の貝層では魚骨・獣骨の包含が多く、古代の貝層では貝殻のみの可能性がある。海浜での活動内容を検討する好資料になると考えられる。（川添和暁）



Ab区遺物包含層の検出状況（北より）



Ab区古代遺物包含層の検出状況（北東より）



Ab区古代製塩土器出土状況（北より）



Ab区竪穴建物跡検出状況（北西より）



Ab区埋葬人骨検出状況（中世以降か 西より）



Aa区出土釣針（ソフトX線写真 ほぼ実大）